

平成 28 年度

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同専門委員会

実践報告書

秋田大学教育文化学部

附属学校学部共同専門委員会

目 次

平成 28 年度 総会・研修会記録

テーマ：「教職大学院の開設と 2 年目の課題—附属での実習を中心に」…………… 1

平成28年度 部会活動報告 …………… 13

<教科別部会>

国語部会

社会部会

算数・数学部会

理科部会

音楽部会

図画工作・美術部会

体育・保健体育部会

英語（外国語活動）部会

技術・家庭部会

<領域別部会>

総合（生活単元学習・遊びの指導・生活科）部会

道徳部会

特別活動（話し合い活動・学級活動・学校行事）部会

学校経営（PTA・保護者対応・学部や外部との連携・教員養成・教育課程経営等）部会

<校園別部会>

幼稚園部会

小学校部会

中学校部会

特別支援学校部会

総会・研修会参考資料 …………… 27

秋田大学教育文化学部附属学校学部共同委員会要項・申し合わせ事項 …………… 31

平成28年度 総会・研修会記録

I 日 時：平成29年2月15日（水） 15:30～16:45

II 場 所：附属小学校 はとの子ホール

III 内 容：

1. 開会あいさつ 教育文化学部長 武田 篤 先生 15:30～15:39

2. 研修会 15:40～16:25

テーマ：「教職大学院の開設と2年目の課題—附属での実習を中心に」

教職大学院における実習の意義	教職大学院	佐藤修司 先生
附属特別支援学校における実習	附属特別支援学校	神部 守 先生
附属中学校における実習	附属中学校	佐藤優子 先生
附属小学校における実習	附属小学校	進藤 亨 先生
実習の成果と改善の方向性	教職大学院	田仲誠祐 先生

3. 閉会あいさつ 副学部長 佐々木 和貴 先生 16:25～16:27

4. 専門委員会（各部会の話し合い） 16:27～16:45

IV 出席者数：

93名

内訳	幼稚園	9名（園長を含む）
	小学校	25名（校長を含む）
	中学校	19名（同上）
	特別支援学校	26名（同上）
	大学院・学部	14名

【開会挨拶（教育文化学部 学部長 武田 篤 先生）】

私からは、資料で教員就職率の推移というのが、お金をかけてカラーで印刷したやつがありますけども、大学の中で、どこも全国の大学もそうなんですけれども、お金がない、ということだけがいつもクローズアップされて、かなり厳しい状況にあるんですけども。

うちの大学も附属とも一番関係する所、教員養成やってる中で、そのこのグラフにあるように、23年度は全国ワースト1、一番下にあるわけです。そこから回復してきまして、ようやくこの昨年の3月に卒業した学生では67.3%、7割弱の学生が100人の内67人ぐらいの学生が教員に就職したということです。全国平均が58.9です。なので、ようやく全国平均を上回った。順位でいくと全国7位ということになっております。

そういった意味で、この背景には先生方の実習への、実習生への指導が有効に働いた結果だろうというふうに推察しております。

その下の方に書いてあるのは、23年度が一番、ワーストワンになった時に、なぜこんなに就職率が悪いんだろうと。全国で学生が4割しか就職しない、教員に就かないというような状況は、単に学生の質の問題ではなくて、教員養成にあたる我々の方針がどこか間違っているんだろうということを反省しました。

その最大の理由はそこに書いてあるように、かなりの4割ぐらいの学生はやはり根っから教師になりたいという形で大学に入ってきます。それから学生の中にはやっぱり100人ぐらいいると10人ぐらいは就職も考えてないとか、どうしたらいいかわからないという学生が存在するのも事実です。なので、一番端の方の学生はそういう学生もいらっしゃるということは認めなきゃいけない。

ただ問題なのは、そのグレーゾーンの中にある、教師に就くか、あるいは迷っているというような学生が大半なんです。そういった学生が前のワーストワンの時には結局は2年生から教育実習を附属にお願いして、19歳の学生が来て、3年生、4年生がやるような実習を受けてくると、実習から帰って来ると、返ってきた言葉が「私はもう先生に向いてない、とても務まらない。厳しい」という形での諦めですね。

なので、そこから附属の先生方、それから公立学校で実習を受ける際の公立学校の先生方にお願いしたのは、実習が終わったら、実習2週間、3週間終わったら、大学に帰ってきたら、「先生になりたい」というような動機付けを図って欲しい。意欲を高めるような形にしてほしいという形で、ずっとお願いしてきました。

この結果がそういった意味で、教師に就こうという学生が全国平均並みになってきたということだと思えます。ですので、今後とも是非実習ってというのは、いろいろな実習、教師になるための様々なことを学ばなければいけないとこなんですけども、第一の目的は特にI期の実習は先生になりたいという学生の意欲を育てるんだと。あるいは肩を押してあげるような実習にしてほしいということは重ねてお願いしていきたいと思えます。

それから、今日は教職大学院の話になりますけども、この後佐藤修司先生から教職大学院とのお話がありますけども、私からも一言ですね。

教職大学院というのは、なぜできたかということがあると思うんですけども、これはやっぱり国の戦力的な発想の中でできています。教職大学院は来年度でほぼ全国にできます。できない県は鳥取県だけで、鳥取は鳥根県、鳥根と鳥根大と共同でやるということになりますので、他はすべての県に設置されるということになります。

大きな目で言うと、教職大学院というのは今までの教員養成は大学、それから採用、研修は教育委員会という形でできた訳です。ですけども、そうじゃなくて、教員養成の段階、そして、にも教育委員会が関与してくるようになるし、それから研修とかにも、大学も積極的にコミットしていきなさいという大きな国策があります。そういう流れができています。

ですので、教職大学院にもわかるように、20人の定員ですけども、現職教員の方が10人、それからストレートマスターの方が10人という形で、我が方は設定しております。

そういった意味で、附属学校が教員養成、大学の附属として、実習を始めとした教員養成に関わってきたのは勿論ですけども、附属の一つの大きな仕事とすれば公開をして、やっぱり県内の先生方に実践を公開していく、

あるいは先導した研究をしていくという役割を担ってきたように、今度は教職大学院というのもそういった意味で教員養成と教員の研修を含めて、長いスパンで県内の教員を作っていくという枠組みの中で考えていくと。

ですので、そういった意味では大学と県教委とのハブ機関として教職大学院というのは位置するし、ある意味では今までやってきた附属もそういう形で両方、養成と研修みたいなところをやっぱり担っていく、そういう使命をこれから持っていくんだらうと思います。

そういう意味で今日の研修は実りあるように願っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。以上です。

【話題提供（教職大学院 佐藤修司 先生）】

1. はじめに

教職実践専攻、教職大学院にあたる訳ですが、そこの専攻長をしております佐藤です。本来であればこういった会を今年度当初ぐらいにやって、実習というのはどういうふうなものなのか、教職大学院というのはどういったものなのかという説明会を開いた上で、スタートできれば一番良かったのかと思いますけれども。

なにせ一年目、手探り状態でここまでやってきて、ようやく落ち着いてきたのかなというふうな状況です。その中で附属の先生方には、ご無理をお願いして、実習などお引き受けいただいて非常に感謝して、この場を借りまして、お礼を申し上げたいと思います。

私の持ち時間5分ということですので、かいつまんでということにしたいと思いますが、皆様方にお配りしている、この秋田大学大学院教育学研究科、教職大学院教職実践専攻というふうに並べている、この資料ですね、ご覧ください。全部説明していると1時間以上かかりますので、この実習にかかる所を中心にちょっとだけ触れて5分以内で終わるようにしたいと思います。

教職大学院その歴史と書いてある所にあるように、2006年の答申で出されて、2008年にスタートしました。その2006年答申に教職大学院がどういったものなのかということとその次の所ですね、教職大学院の目的、機能といった所。それから教育方法、授業形態といった所にも書いてありますので、後程ご覧いただければと思います。

2015年12月に中教審から出された答申はそれを更に進めて、今学部長からもあったように教職大学院を中心にして、教員養成と研修を合体して、教職の、生涯に渡っていかにして学びを蓄積していくのか。そこに教職大学院が中心的な役割を果たすといったことが、この2つの図を見ていただくとよく分かるんじゃないかと思っています。

単に教職大学院に入学するというだけではなくて、科目等履修や履修証明プログラムのようなことを使って、現職の先生方がポイントを貯めていっていただいて、専修免許状を獲得したりとか、いろんなことが考えられているということになります。

その次、実習とは、いうことでこちら2006年のものになります。字ばかりでちょっと申し訳ないんですが、見ていただくとまず(1)教職大学院における実習の(1)ですね。最初の丸の所にありますように、学部の実習は授業実習に偏りがちだったと。でも教職大学院の実習協力校の連携を密にして、学校経営、学級経営、生徒指導、教育課程をはじめ教育活動全体について総合的に体験し、考察するというふうになっています。

その隣、右隣にある(2)も似たようなことが書いてあって、学部はそれに対して最小限必要な資質、能力を養成する。それに対して教職大学院というのは、長期間にわたって、教科指導や生徒指導、学級経営などの課題や問題に関して自ら企画、立案した解決策を実験的に体験、経験することで、自ら学校の教育課題に主体的に取り組

むことができる資質、能力を培うというふうに位置付けの違いを明確にしている。

(1)のその次の丸の下から半分の所ですが、当該学校における教育活動に寄与することも期待できると。実習で単にその人自身の実践力を高めるということだけではなくて、学校の教育活動に寄与すると。特に現職教員である学生の実習であれば、能力を高めることで、学校教育を向上させることにあることに熱意と意欲のある教員が実習校における教育に参画することで、学校側にとっても教育活動を支える一員として期待されるというふうにされています。

似たようなことがその(2)のまた右隣ですね。現職教員の学生は自らの教育実践とは異なる実践を客観的に観察し、体験、参画することによって自らの実践を相対化し、というふうなことが書かれています。

ですので、ストマス、若い方がここの附属で実習されるということもそうですが、今年度佐々木先生が入学していただいていますけれども、佐々木先生が附中に戻られて勤務校で来年1年間実習されるということはこういった意味合いを持っているんだということを、佐々木先生にあまりプレッシャーをかけるとちょっと申し訳ないんですが、そういった意味もあるということをご存じいただければ。

その次、実習の留意点の(1)の所の3つめの丸ですね。教職大学院の実習には特定の問題、課題を解決策を立案し、実地に研修することを通じて、主体的に教育計画の立案と実施、学校へ幅広く学校教育活動に参画し、実習校の責任あるポジションの一員として参画するようにすると。当該大学院生の行う実習としての業務を校務分掌や年間計画に組み込むことなど、そういった具体的なあり方を含めて実習計画を立てるというふうになっています。

(2)右隣ですね。広く学校教育を改革する方向性を目指すと。実習校全体、または地域の学校全体の教育力の充実に繋がる視点を組み込むということが書かれていますし、3つめの丸の所に実習校での教育研究活動にとって成果をもたらすようにするんだと。そして4つ目の丸ですね。実習というのは学校現場における現状を前提として明確化されたテーマ、目的等に向けて計画され、実施されるものにするといった点でも、従来の学部の実習とは大きく違っているといったことをご了解いただければと。

じゃあ、実際それをどういうふうを実現するのかといったことが、これから大きな課題になってくるということで、その点本年度の実績、実践を踏まえて、今日ご報告いただくことになります。

最後の所ですね、実習の課題といった所はこれからちょっと飛ばして、少し離れますけれども、附属学校についても2015年答申は言及しています。その文章は附属学校については地域のモデル校や大学における教育研究の協力といった役割だけではなくて、教職大学院等と連携して、都道府県教育委員会との人事交流を活用して附属学校の特色を活かし、教育実習校としてのみならず、教員研修学校としての役割も加味して検討する必要があるというふうに書かれています。

その右隣は小さい字ですが、大きいA4サイズに拡大したものもありますので、そちらをご覧くださいでもいいですが。附属学校への異動といった所に教員研修学校としてポイントといった言葉を掲げています。ですので、附属学校に来られた先生方がこの附属に行くことによって、いろんな研修を積んで、それをポイントにして、専修免許状を獲得したりとか、そういった構想が書かれているということもご存じいただければ、知っておいていただければということで、書いてます。

附属の公開研、オープン研などそういったものを教職大学院の単位として認めて、皆さん方その単位を獲得するというか、するというふうな、そういった制度との関係も考えられるんじゃないかということをご存じいただければと。私からは簡単ですが、以上にさせていただきます。

【話題提供（附属特別支援学校 神部 守 先生）】

1. はじめに

特別支援学校の神部です。よろしくお願いします。特別支援学校での実習について、簡単にお話します。配布の資料はございませんので、これからスクリーンの方にアップで映しますので、そちらをご覧ください。

本校では、発達教育特別支援教育コースの院生1名が実習を行いました。期間は主免の教育実習は10月中旬まで入っていたことから、小学校さんや中学校さんよりも2週間遅れてスタートしました。

実習生が基礎免許として中学校と高校の免許を持っていたこと。それから私が中学部を担当していたことから、ほぼ中学部で実習を引き受けることにいたしました。

実習した院生について、ちょっとお話をいたします。後期、この実習を附属校で行なうのは学部卒の院生となっておりますが、この院生、実は大学卒業後、約10年に渡って、県内の特別支援学校で臨時講師として勤めてきた経験がありました。

特別支援教育の院生の方は、全部で4名いるんですけども、この実習生以外3名は現職教員の院生でした。現職の院生はこれまでの教育経験から、明確な課題意識をもって入学してきています。今回の実習生はこの現職教員の院生と交流する中で、一生懸命にいろんなことを考えたんだと思います。私と始めに実習について話し合った時には、とてもこんな実習で扱うには少し大きすぎるテーマを考えていました。

そこで、事前に数回面談を行なって、彼が教職大学院で学ぶ事の意義とそれから実習を通して今何を学ばばいとかということを整理いたしました。まだ教員として採用されていない彼にとっては、特別支援教育の現代的課題というものを扱うよりも、彼自身が力をつけることが必要ではないかと考えました。そして、授業力の向上を第一にあげ、児童生徒の指導を行い、それに基づいて指導法を検討したり、教材教具を工夫したりすることで、授業づくりをしっかりと行なっていくことを確認いたしました。

一方、彼自身がテーマの一つとしてあげていた個別の支援計画については、ちょうど本校の研究の中で本人主体の視点による私の応援計画というものを作成していたことから、その作成と活用について、学ぶ機会を設けることにいたしました。

授業力の向上という点についてですけども、授業を行うためには児童生徒の障がいからくる特性を含めた実態把握がとても重要です。子どもを知り、信頼関係を築くため、中学部1年生の学級を配属学級とし、給食を含めて、終日その子ども達と過ごすことにしました。

実践をする上、授業についてですけども、当初知的障がい特別支援学校の特徴的な授業である領域、教科を合わせた指導。例えば生活関連学習ですとか、作業学習が良いかなあと考えたんですけども、週1回の実習であること、時間割の関係から、私の方から国語、数学というのを提案しました。

こちらが本年度の本校中学部時間割なんですけれども、生活関連学習ですと、彼が実習に来ない木曜日や金曜日に学習が進んでしまうこと。それから作業学習の方は中学部は月曜日と水曜日なんですけど、高等部も火曜日と木曜日に設定されています。使用教室が重なっていることから、曜日変更が難しい状態でした。

国語、数学ですと中学部全体を生徒の実態や課題に応じた縦割りグループで行なっているんですけども、これであれば曜日によって学習内容を固定することで、週1回の実習授業に対応が可能だと考えました。

実習生は国語の授業を希望しましたので、この期間火曜日は実習生と国語の勉強をするということになって、そのことは生徒にとってもとても分かりやすい状況になりました。

個別の支援計画の作成と活用については、研究主任から講話をしてもらった他、実践計画ですとか、それから生徒が書いたワークシートを見てもらって学ぶ機会としました。放課後の時間を利用しましたが、主に実習期間の前半にこのことを行なって、後半は授業作りの方に時間を費やしました。

このような実習を行なってみて考えた成果と課題です。まず毎週火曜日の実習ということで、実習日と実習日の間に1週間という時間があることから、彼自身が振り返りや分析をしっかりと行うことができたと思います。教材研究についても同様です。

また実習期間が10月から12月長期に渡ったことから、学部2、3週間の実習ではわからない生徒の成長ですとか、変化に気づくことができ、児童生徒理解という点では大きな収穫になったのではないかと思います。

一方課題としては、時間割の変更が容易でないことから担当できる授業に限られてしまうこと。それから教材準備ですとか、TTの打ち合わせ、模擬授業などのために実習日前日の夕方に来校しなければ授業ができなかったということがあげられます。

来年度以降、実習を行う院生の研究課題に応じて実習をカスタマイズしていく必要があり、この点が難しい点ではないかなと考えています。

最後に実習生自身のメリットについても触れたいと思います。実習生はこれまでさまざまな学校で講師を経験し、たくさん子ども達を見てきました。今回教職大学院で学び直しをすることで、その経験に理論を重ね、深めることができたのではないかと思います。

このことは教職大学院をめざす理論と実践を考えます。彼自身の2年目の学習に期待すると共に、学びの演出を抽出するようにサポートしていきたいなと考えておるところです。以上です。

【話題提供（附属中学校 佐藤優子 先生）】

1. はじめに

附属中学校の佐藤です。座って失礼いたします。資料の方、1枚準備してありますので、そちらの方、ご覧になりながらお聞きください。

今日は附属中学校で行なわれた教職大学の教職実践インターンシップについて、私が担当したSさんの実習についてお話させていただきます。

最初に6月に担当する院生の方と打ち合わせをしました。お互いにメールアドレスを交換し、連絡を取り合えるようにしました。メールでは打ち合わせの日時の連絡を取り合ったり、計画書や指導案を送ってもらったり、また送ってもらった指導案に気付いたことをメモして、を繰り返したりをしていました。また実習に入る前は、8月と9月に1度ずつ学校に来てもらって、打ち合わせをしました。

後期実習は10月4日から毎週火曜日8週間に渡って行なわれました。院生の方が自分のテーマを設定して、研究するための実習だと伺っておりました。そしてSさんは国語の授業におけるユニバーサルデザインというテーマで実践したいと考えていました。

実習の計画を進める中で、一番の問題となったのが毎週火曜日8週間ということです。1年生の国語は週に4時間あるので、8週間だと3から4単元ぐらい進んでしまいます。私が進めている授業を火曜日だけ院生のSさんに授業をしてもらうという方向では、Sさんも授業の準備がしにくいなということを感じました。

そこで8週間で求められる8時間を1単元として、Sさんにすべてやってもらうことにしました。火曜日は私が受け持っているクラス4クラスの内、3クラスの授業が入っています。ですから、Sさんの授業。その他の曜日は私の授業と2つの単元を同時進行で行なうのです。もちろん、火曜日にSさんの授業を受けられない1クラスは私が代わりにSさんの授業をして、どのクラスも同じ内容を学習できるようにしました。

どの単元をやるかは、こちらから現代文と古典の2つを提案し、その中でSさんが自分の研究テーマに基づいた授業がやりやすいものを選んでもらいました。

大学の成田先生との相談の結果、Sさんは古典の授業をすることにしました。大学の阿部先生からはSさんの授業が1週間に一度しかなく、他の曜日には私が別の学習を進めることで連続性が無くなることから、生徒の授業へのモチベーションが下がるのではないかと。授業の内容を忘れてしまうのではないかとのご指摘もいただき

ました。

そこで授業の内容を生徒が記録した学習シートを拡大コピーして、1人分ですけれども、教室に掲示して前回の学習内容がいつでも見られるように、そして意識付けができるようにしました。生徒達にも火曜日はS先生の古典の授業。その他の曜日は私の現代文や文法の授業というふうに話しました。

そのように学習する着度が全く違うことで、生徒たちも火曜日はS先生の古典の日と切り替えができていたように思います。

8週間の実習では1週目は生徒達の様子を見てもらう観察に充てました。2週目からいよいよSさんの授業が始まりました。最初は3クラスの授業を全部お任せするつもりでいましたが、最初のクラスの授業を見て、Sさんが課題の提示や指示の仕方ですり少し困っている様子が見られました。そこで次のクラスは同じ指導案で私がやって見せ、最後のもう一クラスをまたSさんにやってもらうという方法をとってみました。

またある時はSさんから、前時とのつながりをどのように課題に持って行けばいいかという相談が事前にありましたので、TTで授業を進めたこともあります。

授業の導入部分は私、展開の部分でSさんと私でやりとりしながら、SさんのT1をやってもらうという形です。Sさんの指示や説明でちょっと足りないかなあという所の時は、私は遠慮しないで入るようにしました。

黒板の板書も、どのように生徒の発言を取り上げたらよいか悩んでいた様子が見られましたので、SさんにT1で指示や発言をしてもらいながら、生徒の発言はT2の私が板書するというTTを行なったこともあります。

授業の検討や次の授業の内容については、放課後に短い時間で時間をとって話をしましたが、TTとか、私がどのように授業に入るかは、朝や直前の休み時間の短い時間で打ち合わせをして行いました。

まだまだ私も勉強不足ですが、Sさんにはこうしてみたらいいんじゃないの?という実践の形を実習の中で見ていただけたのではないかと思います。Sさんも臆することなく、こういうことで今困っています。どうしたらいいですか?ということを気軽に話してくれたので、その点をどう改善すべきか、私も考えて授業に入りました。

Sさんは8週間の実習で、板書もとても上手になりましたし、指示や発問も自信を持って明確にできるようになったと傍から見て感じました。

Sさんにはどの生徒も楽しく学べ、達成感のある国語の授業を実践していただきました。古典作品を題材にした絵本を準備してくれたり、関連する短歌を見つけてもらったり、大学の先生方のご指導のもと、とても魅力的な教材研究をされていて、私もやってみたいなと思って、いろいろな形で口出しさせていただきました。

課題はやはり日程です。1週間じっくり授業の準備ができるという利点はありますが、やはり1週間に一度しか来ないということは、授業の進め方にも制約ができますし、やはり生徒が前の授業を忘れてしまうということがあるかもしれません。この点を来年度考慮していただければと思います。

短い時間でしたが、つたない発表を聞いていただいて、ありがとうございました。以上です。

【話題提供（附属小学校 進藤 亨 先生）】

1. はじめに

それでは、附属小学校の後期のストレートマスターの実習についてお話しします。今年度附属小学校で後期実習を行なったストレートマスターの大学院は6名です。1年生から6年生まで各学年にそれぞれ1名ずつ配属されました。

本日は時間の関係上、2名の学生さんの取り組みの様子についてご紹介させていただきます。4年生に配属された鎌田タダフミさんですが、実践教科は国語です。大学4年生の実習の際には、『ごんぎつね』という物語のクライマックスの場面で、1時間の指導案を作成して授業した経験があったそうです。

今回の実習では『ごんぎつね』の単元を丸々扱い、単元計画を立てて、その中で2時間の授業を行いました。

実習生の鎌田さんは、大学生の時に行った主免、副免の実習と今回の教職大学院での実習授業の違いをこのように話していました。

「主免、副免での実習は、教材ありきの授業で、実際に子どもの姿をあまり想定することはできていなかった。しかし、教職大学院での授業は、子どもありきの授業を考えられるようになった」ということです。

こうした子どもの姿を想定して授業をするっていうことを考えられるというのは、すごい大きな成果ではないかと感じております。

指導案作成から授業の検討会までは、次のような流れで行なわれております。指導案作りは、配属学級の担任とメールでやりとりをしながら進めました。実習日に打ち合わせをしたのですが、担任に質問することが焦点化されていたので、放課後の時間は1時間ほどしかとれなかったにも関わらず、時間を非常に有効に使うことができたそうです。

実際の授業では、実際に子ども達が『ごんぎつね』を読んだしょはつの感想を元に単元構成をして、子どもの問いを大切にしたい、そういう授業を展開することができたそうです。

しかし、子どもをイメージして作成した指導案であっても、実際に授業をしてみると鎌田さんは自分のイメージとは違っている点というのを多く感じたそうです。そこで授業後の検討会で、担任と子どもの発言の問いかけ方や発問の内容までを振り返りしたそうです。そのことによって、授業を行なった鎌田さんだけでなく、指導した担任にとっても、有意義な検討会になったということでした。

例えば、児童A君がこのような発言をしたが、その際どのように取り上げて、他の子の発言につなげればよかったのか。B君の発言はどのように切り替えしたり、揺さぶったりすれば良かったのか、また個で考えるだけではなくて、グループで相談する時間を取り入れることで、より考えが深まったのではないかなど、具体的に吟味し、次の授業に活かすという、極めて実践的な振り返りを行なったそうです。

このような実践により、1回目の授業よりも2回目の授業の方が予想される子どもの反応を、より具体的にイメージできるようになり、指導案のように思われると担任は鎌田さんの成長を感じています。

鎌田さんからも、予想される子どもの反応を具体的に書き出して、授業作りする大切さに気付いたという感想が聞かれました。

実習で教師の力量を高めるといふ点についてお話しします。配属学級の担任は、鎌田さんが1日担任を行なった際、自分が担任だったらという意識をもって、実習に臨んでいる姿勢を強く感じたそうです。学級全体へ呼びかけする場面、清掃活動などでグループに声をかける場面、一人ひとりに声をかける場面など、集団と個に対応する場面、部分を意図的に分けて指導するという様子が見られたんだそうです。

放課後に行ったその日一日の振り返りでは、「A君、B君にこういうふうなトラブルがあって、こういう指導をしたんですが、どう思いますか？」とすごく具体的な事例をもとに担任にアドバイスを求めることが多々あったということです。

清掃活動などでの指導では、今回はこの部分を見たいという視点を決めて指導に臨む姿も見られたそうです。配属学級の担任は、鎌田さんが大学生生活の4年間でやりたいことをしっかりと見つけていて、教職大学院での実習が、すべて課題意識を持った行動になっていたことが教師としての力量を総合的に高めた要因なのではないかとふうに考えているそうです。

続きまして、6年生に配属された柴田ショウゴさんの取り組みを紹介します。柴田さんの実践教科は理科です。研究テーマが理科教育と関連した児童向けの防災教育の実践というものでした。

柴田さんは実習前に、インドへの旅行を体験しています。配属学級との子ども達との出会いの場面で、インド旅行の体験を写真の提示と共に子どもに紹介したそうです。インドの旅行の体験を次にインドの地形につなげ、更に自分の研究テーマである防災教育で扱う火山につなげていくという、そういう工夫のある提示をしていたということでした。

配属学級の担任も、最初は単なる旅行記のように見えた紹介が、実は徐々に子どもたちに火山への興味を持た

せるように発展させていくという、すばらしい手立てであったと感心しておりました。

教材研究の段階では、大学の担当教官である林先生に火山の授業をする際に、専門的な知識が6年生の子ども達に理解できるかどうかという指導を細かく受けたそうです。そして授業の振り返りでも、毎回4、50分の時間をとり、詳細な所まで行ったそうです。

柴田さんが取り上げたのは、火山のめぐみということなのですが、これは6年生の理科で学習する内容の発展です。一般的には火山は恐ろしいものという思いが強いのですが、この火山の良さに着目し、火山の二面性を学習内容とした試みが素晴らしい考えだったと担当教官の林先生は評価しております。

このような指導を受けて、授業の前には放課後遅くまで残って、火山の噴火実験の準備を入念に行なっている姿が見られました。どのようにして子ども達に提示をしたら、効果的なのか何度も何度も試行錯誤している姿が見られました。先に紹介した鎌田さん同様に子どもの姿を想定した取り組みになったのではないかと考えております。

授業後には子ども達にアンケートをとり、子ども達のもっと知りたいことを把握し、次の授業に活かすように、子どもの興味、関心を大切に授業作りを心掛けていたようです。

また配属学級の子も達が、音楽の授業で『流浪の民』という曲を学習している際は、自分が学生自体に歌った時の経験を話したり、修学旅行の事前学習をしている際は、修学旅行地での函館についてのアドバイスをしたりして、ちなみにシバタさんの出身地が函館だそうです。子ども達と交流を深めていく様子が見られたそうです。

一日担任を行なった際は、一つひとつの言葉を選んで子ども達に話しかける様子が見られ、やはり主免・副免の実習生とは一味違うような、様々なことを任せられる力量がついていると担任は感じたようです。

柴田さんが真面目な性格なので、最初は気楽に子どもとコミュニケーションをとれるタイプではないのかなと思っていたそうですが、慣れるにしたがって積極的に子ども達に声をかける場面が多くなったそうです。児童理解が深まったことで、子ども目線で考えることができるようにコミュニケーション力がとても高まったのではないかと感じているそうです。

私たちの仕事は、子ども達とのコミュニケーションが最も大切な基盤となっています。そのコミュニケーション力を高められたことが、実習での一番の成果ではないかと担任は考えています。

教職大学院で得られる学びは経験を通して、極めて実践的な学びだと感じました。それは学生と担当教官との関係性の中で得られるものではないかと。そういうことを本年度の取り組みを通して、感じています。

来年度も大学の先生と附属の教員と学生が、より関係性を密にすることで、更なる成果を上げていきたいようにしたいと考えております。以上、ありがとうございました。

【話題提供（教職大学院 田仲誠祐 先生）】

1. はじめに

まず最初に今年立ち上げの年で、ほんとにどうやったらいいかというふうなところでの実習、今紹介していただきましたように、きめ細かな実習をしていただきました。ほんとうに附属の先生方には感謝いたします。どうもありがとうございます。

私の方からは、ただ全体像と言いますか、実習はどういうふうに行われているのかというふうなこととか、来年どう行なわれる予定なのかというふうなところを紹介したいと思います。短い時間ですけれども、ちょっと早口になるかもしれませんが、よろしく願いいたします。そこにありますように、本年度のどういうふうに行ったのか。それから成果と課題はなんなのか、次年度どうやるのかということを紹介したいと思います。

まず教職大学院の実習というのは、名前が右の方にありますように、教職経営プロジェクト、教職実践プロジェクト、教職実践インターンシップという、3種類あります。

これがまずどういうものかということ、教職経営プロジェクトというのは、管理職コースの人です。1年コースの人がやる実習になります。それから教職実践プロジェクトというのが、現職教諭です。インターンシップが学部卒の人がやる。

1, 2つありますけれども、1というのが1年次。これ、4単位ですので、20日間やります。それから2年次でやるのが6単位、これ、30日。今年は1年目でそこにある2年次がいまませんでしたので、特別な形で附属に全員が来ているというふうなことがあったり、来年とは違う形で今年はやらせていただいた。まずやるということを頭に入れておいていただいて。

原則的には附属学校園にお願いするのは、教職実践インターンシップという、学部卒の人を中心に指導していただくというのが附属にお願いする実習になります。

今年は特別、特殊にということで、どういうふうに行ったかということ、こんなことをやりました。みんな一緒にやらなきゃいけない感じで、前期どういうふうに行ったかということ。左の方見ていただければ、前期は附属学校園に全員で行きました。幼稚園も小学校も中学校も特別支援学校も、全部現状を知るのには大事だということで、2日間ずつ全部来させていただいた。

それから現職教員であれば、全県指導主事会議。普通の教員でなかなか出る機会がないんですが、秋田県でこういう課題があって、どういうふうに進んでいるかということを実際に全県指導主事会議に出て、課題を理解するというようなことをやったり。

それから後期の方になるとインターンシップですね。学部卒の人は附属にお願いしました。それから現職の人は公立学校に行って、実習を今年はやりました。これは今年だけのことで、来年からは変わってくるということになります。

やってみて、どういう所が課題だったかということ、特にこの赤い文字の所が附属学校での課題の所でしたので、ここの所をちょっと紹介します。

どういうことかと言いますと、8日間の附属4校園研修。これ、前期ですね。幼稚園も小学校、中学校もすべての学校園に行くということは、とても異校種を理解する非常にいい機会だったと。小学校だけというふうなことで終わるよりも、いろんな学校を見るのはとてもいい機会だということがあります。

ただ課題としましては、ここの所が、現職教員が附属に来るということはあまり想定していませんでしたので、ほんとは現職教員にとっても意義のあることだと思うんですけども、来年からどうするかということが課題の一つあります。

それから2番目。分散方式が集中方式かということ。これは今年毎週火曜日をやってきた。これが賛否両論あるんです。反対だって言う人は、火曜日来るっていうことではなかなか連続性がないということですね。特に学部卒の人は、なんか最初来てもお客さんのようだ。子どもとも接しれないし、子どももわからない、学校もわからない。なんか時々来て、なんか溶け込めないという課題がある訳です。

それからもし集中方式がいいかとなると、じゃあ、一気に後期8日間ですけど、8日間だけ来て、ほんとにいいのかという問題があります。やっぱり継続的にインターンシップやってくることによって、長期間学校に来ることの良さっていうのもありますので、そういったところの集中方式と分散方式のよし悪しをどうするかというのが一つ課題です。

それから2番目、3番目。インターンシップの狙いの再確認。これは教育実習とどこの違いでやればいいのかという、指導する立場での悩みもいただきました。こういった所での課題を踏まえて、次年度どうするかということをお勧めしたいと思います。こういう方向でということですので、是非お願いということになるかと思っておりますけれども。

まず取り敢えず附属に関係する所をご説明したいと思います。まず目標の所です。これ、インターンシップで

すので、実習とどこが違うかというやっぱり実習って言うと、なんかみんな決まったように指導案を書いて、なんかプログラムが決まっているんですけど。

このインターンシップは、働きながら経験を積むっていう所がもっとも大きい所ではないかなと思います。その学校の職員みたいにして、働ければ一番いいかなと思います。

佐々木先生、ご自身、後期に岩見三内に行って、忘年会に招待されまして、完全にそこの学校の先生のように働いてやってもらったと。実習やるんじゃないかと、その学校の先生になってみて働く、そうやって経験を積むっていうふうな感じにしてもらえばいいかなというふうに思います。なんか、そういう感じですね。

目標の所にありますけれども、じゃあ、どういうことをやるのかというまず各コース、特に前期は、来年は前期は幼・小・中・特、これ、4つの学校園を知るっていうのはとてもやっぱり意義があるので、前期はそれでもやりたいということです。附属学校園の方も前期は公開とかあって、ずっと来られるとまた大変かと思いますので、この2日ずつ、前期は4つの学校園でまずその現状を知る、現状と課題を知るとというのが前期にやる。後期に自分の希望する学校園で実習を積むというふうな計画です。

2番目の目標の所ですけど、希望する学校種の教員の仕事を体験して、経験を積むということです。

それから3番目が授業実践を通して、研究課題を明確にする。今年やってみて、なかなか学部卒では研究課題を明確にしながらやりなさいと言っても、なかなかできないです。1年間やってみて、やっぱりこういうことが課題なんだなって、次の年はこういうふうにして実習をやろう。そういう次の年に向けての課題を明確化できればいいなど。1年目で確実に例えばこうやって成果が上がりましたというよりは、2年目の実習に向けて、課題を明確にするということができれば、附属の実習のすごくいいのかなというふうに考えます。

実際にどうやるかという、前期にオリエンテーション、4月は大学の方でやります。5月の、ここ折衷案なんです。違う。5月が附属4校園実習ですね。これは去年と同じ。4校園を知ると。違うのがこちらの後期の実習なんです。ここの所をどうやるかという、やっぱり学部卒では毎週来れないんで、9月下旬に5日間の集中実習をやらせてもらいたい。それによって、その学校に慣れる。子どもを知る。まず取り敢えずは5日間連続で来て、そこに慣れるということをやります。その後、だいたい火曜日ごとに一生懸命教材研究をしながら、毎週火曜日に来て、授業等で経験を積ませてもらうというふうな計画であります。

だいたい11月、12月になると附属もだいぶ忙しいですから、11月までには実習の方、終わるように計画を作ればなあというふうに思っています。

これが附属学校園での実習をお願いすることです。

この実習生がその後どうなるかということなんですけれども、2年生になった時に、でもこれで九分になっちゃった。もう1枚です。一応あとはこれで終わりますので、先生方もこのプリントに用意しました。インターンシップ1, 2というので、2年生になってからの所がここにあります。見ていただければ公立学校に行って30日やることになります。

ですから、附属小学校、附属中学校、特別支援学校、幼稚園でやったことを活かして、今度は公立学校で2のような実習をします。

それから裏のページには、教職実践プロジェクトというので、今度は現職教員はこういう実習をしますよというのが、裏の方にあります。これは附属学校の先生も来られる可能性がありますので、実習になります。

例えば先程の指導主事の研修会に出るとか、それから指導主事の同行研修とか、かなりそういったミドルリーダーとしての研修なんかもやりたいなというふうに考えているところであります。

どうか、こういった形で改善を図りながら進めたいと思いますので、来年度もどうかよろしく願いいたします。

【閉会挨拶（教育文化学部 副学部長 佐々木 和貴 先生）】

佐々木です。時間も押しているので一言だけですけれど、お聞きいただいておりますのとおり、教職大学院というのは、学部の先生方と附属校園の先生方と両方でこれから育てていくというものだと思います。ですので、皆様方の来年も一層の協力をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



平成 28 年度 部会活動報告書

部会名	社会	記入者名	鈴木 聡 (所属：附属小学校)
<p><今年度の実績></p>			
<p>1 公開研究協議会 に向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小中とも公開研究協議会に向けて事前打ち合わせ・指導案検討を行った。 事前打ち合わせ 小学校：5月25日(水) 中学校：5月16日(月) 公開研究協議会 小学校：6月10日(金) 中学校：6月 3日(金) 			
<p>2 部会内での取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校：次年度研究に向けて，教科の特性を生かした研究テーマと重点について話し合い， 見 通しを立てた。(2月) ・中学校：授業を見合う会(2月：3年) 次年度研究をふまえた普段の授業を見合い，授業改善に生かす試みを行った。 			
<p>3 共同研究の取り組み</p> <p>秋田大学の社会科教育学研究室による授業づくり演習の一環として，「六郷の湧水」「秋田市のまちづくり」「仏画氏鈴木空如」をテーマにしたニホンジカの食害に関する授業実践を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校での実践： 7月20日(水) 10：45～12：20(4年B組) ・中学校での実践： 7月19日(火) 13：30～15：25(2年B組) 			
<p>4 初等社会科での講義</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来教職を希望している学生に対し，社会科を学ぶ意義，社会科の授業の在り方について， 4 回にわたり講義を行った。 			
<p><次年度に向けた予定・課題等></p>			
<ul style="list-style-type: none"> 1 公開研究協議会に向けた打ち合わせ，指導案検討 2 部会内での取り組み(小学校：部内研修会，中学校：授業を見合う会 など) 3 授業づくり演習(学生による授業実践) 小学校：7月上旬～下旬(詳細未定) 中学校：7月上旬～下旬(詳細内容) 4 初等社会科での講義 			
<p><次年度の体制></p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・部会長 外池 智先生(秋田大学) ・副部会長 鈴木 聡 (附属小) ・書記 嵯峨 隆之 (附属中) 			

部会名	算数・数学	記入者名	小野寺 拓矢 (所属：附属小学校)
<今年度の実績>			
<公開研究会>			
秋田大学教育文化学部附属中学校 公開研究会 6月3日(金) 授業者 阿部文勇 「連立方程式の応用」(2年D組)			
秋田大学教育文化学部附属小学校 公開研究会 6月10日(金) 授業者 堀井綾子 「たすのかな?ひくのかな?」(2年A組) 授業者 小野寺拓矢 「分け方を考えよう」(3年B組) 授業者 平塚 定 「分数の計算を広げよう2」(6年C組)			
<科学講座> 附中生対象			
科学講座①(数学) 9月16日(金) 「あみだくじの数学」 秋田大学; 大内将也先生			
科学講座②(数学) 12月16日(金) 「図形の視点からの不等式」 秋田大学; 原田潤一先生			
<第32回小学校算数教育研究全国(秋田・大仙大会)>			
期日 10月23日(日) 会場 大仙市立大曲小学校 授業者 佐川喜一 「図形のひみつを見つけよう」(小6) 授業者 堀井綾子 「式を読む ～数量の関係を表す式～」(小3) 授業者 目黒 健 「2進法から問題を発見する」(中1)			
<オープン研究会>			
秋田大学教育文化学部附属小学校 オープン研究会 9月27日(火) 授業者 堀井綾子 「かけ算ってなあに?」(2年A組)			
<次年度に向けた予定>			
公開研究会 附属中学校 6月 3日(金) 附属小学校 6月10日(金)			
東北地区算数・数学教育研究大会 11月9日(木)～10日(金) 由利本荘市立 新山小学校・本荘北中学校			
<次年度の体制>			
部会長 原田 潤一			
副部会長 堀井 綾子			
書記 渡邊 博久			

部会名	理科	記入者名	清水 琢 (所属:附属小学校)
<p><今年度の実績></p> <ul style="list-style-type: none"> ・附属小, 中学校の公開研究協議会に向けた取組 ・附属小, オープン研に向けた取組 ・附属中の理数教育プロジェクト <ul style="list-style-type: none"> 科学講座 (理科としては3回, 参加人数 各約30名) <p>平成28年7月15日 (金) 16時10分~1時間程度 担当講師 林 正彦 講演題 「目で見る原子・分子の世界 -霧箱と光電効果-</p> <p>平成28年11月11日 (金) 16時10分~1時間程度 担当講師 本谷 研 講演題 「流れや渦の可視化 -前線や竜巻の実験-</p> <p>平成29年1月27日 (金) 16時10分~1時間程度 担当講師 岩田 吉弘 講演題 「実験で探るイオンの性質と溶解度の秘密」</p> <p>秋田一受けたい授業 (小学6年生対象) 参加人数 80 名 「イカの解剖」 菊地 智則 監 修:石井 照久 「液体酸素の実験」真崎 敦史 監 修:岩田 吉弘 林 正彦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共同研究 高橋 猛 (附属小) と田口 瑞穂 ・共同研究 小松 智子 (附属中) と川村 教一 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業や講座等, 附属小中学校から, 大学教員への要望を積極的に出していく。 → 情報交換をして, 組織的, 継続的な実践を行っていく。 ・具体的な研究実践の吟味, 積み重ね, そのまとめや報告を確実にやっていく。 <p><次年度の体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・部会長 林 信太郎 (秋田大学) ・副部会長 高橋 猛 (附属小学校) ・書記 小松 智子 (附属中学校) 			

部会名	図画工作・美術	記入者名	三浦 里子 (所属：附属小学校)
<今年度の実績>			
<ul style="list-style-type: none"> ①学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み ②公開研究協議会などに向けた取り組み ③共同研究や共同授業などの取り組み ④学外の研究・研修団体などに関わる取り組み ⑤部会の組織、運営などに関する取り組み ⑥その他の取り組み 			
①②について			
<p>(小学校) 公開研究会では、長瀬先生から、研究テーマや重点についての助言や題材のもつ価値、子どもに付けるべき力、共通事項など、授業を行う際のさまざまな点について専門的な助言を受けた。また、授業者の疑問について、丁寧に相談にのっていただいた。授業後には、題材について、指導について、研究テーマである「対話」と教科の本質の関わりという視点からの確かな助言をいただいた。</p> <p>また、部内研究会の授業後の検討会では、「対話」や技能面の支援、展示方法等についての指導助言をいただいた。</p>			
<p>(中学校) 授業づくりの段階から石井先生の指導を受けた。題材の構想や本時の展開、ねらいや生徒の実態に適した支援について助言をいただいた。また、パッケージデザインについてデザインの観点からの共働の考えを示唆していただいた。</p>			
③について			
<p>小学校教諭が中学校の2年生に「広告スティックから生まれる形」の授業を行った。広告の紙を細く巻き、出来上がったスティックをつないで、形をつくり上げる内容である。できた形に題名を付けることは、小学校も中学校もなかなか難しいということが分かった。また、小中合同の研究部会を開き、授業での子どもの姿や表現について意見交換したり、次年度の研究についてアドバイスし合ったりした。</p>			
<次年度に向けた予定・課題等>			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校、中学校共に公開研究会に向けて、授業づくりの段階からかかわり、互いにアドバイスし合う。また、研究協力者と授業者が密に連絡をとり合い、専門的な指導助言をもらい、教材観や指導観、研究テーマを深めていく。また、H30年度の造形研全国大会に向けての情報交換をする。 ・ 特別支援学校のふたば学級と小学校低学年の図工を通じた交流を試みたい。 ・ 小中学校で部内研での授業提示を行う際に、図工・美術部会の部員全員にメールで連絡し、授業を参観してもらおう機会をつくる。 			
<次年度の体制>			
部会長 遠藤 敏明 先生			
副部会長 長瀬 達也 先生			
書記 小柳紀恵子 (附属中学校)			

部会名	体育・保健体育	記入者名	松本 奈緒 (所属：秋田大学)
<p><今年度の実績></p> <ol style="list-style-type: none"> 保健体育科教育演習Ⅲにおいて、加賀谷武英先生に保健体育教諭志望学生に講話をしていただいた。内容としてはなぜ教師になったのか、学校での保健体育教諭としての業務内容についてであった。この講話の内容は秋田朝日放送の夕方ニュース番組で取り上げられ、その様子が全学のHPで紹介されるなど大学の広報にも貢献した。 附属中学校公開研究協議会において、「リズムダンス」の授業公開を、授業者：加賀谷武英、共同研究者：松本奈緒で行った。事前の授業研究やキネクトXboxのダンスゲームやカードを用いた教材の提供を大学側が行い、タブレットを使用したグループ間の意見交換（ICTの使用）を含めたリズムダンスの授業を附属中学校の公開授業を行った。授業の過程では生徒を対象として自由記述のデータ収集を行い、3月末の紀要論文として出版される予定である。 附属中学校の公開研究協議会において、ボール運動領域の授業公開を、授業者：三浦大介、共同研究者：佐藤靖で行った。公開の内容は三浦大介先生の「たからはこびおに」、佐々木雅巳先生の「ビュッとなげようシュートゲーム」であった。 <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <ol style="list-style-type: none"> 保健体育科教育研究Ⅲの講話については引き続き行う予定なので附属中学校から外部講師として大学へ招聘したい。 大学において卒業論文で小学校を対象としてプレルボールを研究したいという4年生がいるので附属小学校に協力をお願いしたい。 大学において科学研究費補助金の関係で小学校を対象とした体育授業（体操領域、ボール運動領域）における生徒の描画分析について4カ年計画で研究を実施する予定なので、附属小学校に協力をお願いしたい。 <p><次年度の体制></p> <p> 部会長 松本 奈緒 (秋田大学) 副部会長 加賀谷武英 (附属中学校) 書記 三浦 大介 (附属小学校) </p>			

部会名	英語部会	記入者名	若有保彦 (所属 教育文化学部)
<p><今年度の実績></p> <p>①学部の教育の充実に向けた共同の取り組み</p>			

- ・教育実習事前指導における附属中での一日実習
- ・小学校英語の専科教員として必要な知識技能を身につけることを目的とした「初等英語科教育学」の授業の一環として、附属小学校5, 6年生のクラスで行い12名の学生（英語教育コース3年生11名、大学院生1名）が模擬授業を実施した。各自2回行いPDCAサイクルを大切にしながら実践的学びを行った。
- ・1月の「外国語活動」の授業で教育実地指導講師として附属小学校の先生から学生のマイクロティーチングについての指導助言をいただいた。

②公開研究協議会などに向けた取り組み

- ・附属小学校の11月のオープン研での公開研究会を機会として、オーストラリアの小学校 Saints Peter and Paul's Catholic School と6年A組が11月25日にスカイプによる遠隔合同授業を実施した。
- ・大学教員と中学校英語担当教員または小学校外国語活動担当教員との打ち合わせ及び大学教員による事前の授業参観

③共同研究や共同授業などの取り組み

- ・小学校においては11月22日の附属小学校オープン研での授業参観及びコメント
- ・中学校においては2月27日の「授業をみあう会」での授業参観及びコメント
- ・中学校での英語授業について、オーストラリアに留学中の学部学生と協力して行った

④学外の研究・研修団体などに関わる取り組み

- ・附属中学校の先生に東北英語教育学会秋田支部の英語授業研究会での講師としての参加及び協力をいただいた

⑤部会の組織、運営などに関する取り組み

- ・特になし

⑥その他の取り組み

- ・附属中学校の国際交流室への英語教育専攻学生及び院生の協力

<次年度に向けた予定・課題等>

①について

- ・学生の教育実習の授業の録画については、今後も継続して実施したい
- ・教職大学院の「小学校英語の理論と実践」など、授業の一環で附属小学校の授業参観を行わせていただきたい

②について

- ・中学校では、3年計画の3年目として、これまでの「発信の工夫」や「積極的な受信」をベースにさらに発展した取り組みを行ってみたい
- ・小学校では、オーストラリアの学校との交流を継続して行いたい

③について

- ・中学校で英語科を対象に春季授業研究会が行われるため、大学の教員が指導助言者として協力する

④、⑤について

- ・特になし

⑥について

- ・文科省から学習指導要領の改訂案が2/15に出されたことへの報告

<次年度の体制>

部会長 佐々木雅子先生 副部会長 (未定) 書記 若宥保彦		
部会名	技術・家庭	記入者名 石川 優子 (所属：附属小学校)
<p><今年度の実績></p> <p>○公開研究会は、それぞれの研究主題に迫る取組が実践できた。小学校家庭科では、5年生で題材「やってみよう 家庭の仕事」で簡単な調理「ゆでる」についてなぜ野菜をゆでるのか実験実習を通して考えていく実践をした。中学校では題材「家族の安全を考えた室内環境の整え方を知り、快適な住まい方を工夫しよう」の中の「安全な住まい方」を多様な家族の視点から考えることを実践できた。社会に参画する主体を育てる授業が行われた。事前の指導案検討会や研究授業、研究協議においても、小・中・大学が連携して活発な意見交換が行われ、授業改善につながる研究活動ができた。</p> <p>○教育実習生の受け入れもスムーズに行われた。資料提示やワークシートの検討等、模擬授業等を行うことを通して、積極的な授業実践や教材の工夫、改善に熱心に取り組む姿が見られた。</p> <p><次年度に向けた予定・課題等></p> <p>○公開研究会は、研究主題を踏まえ社会との接点をもったテーマや題材を検討し、質の高い授業づくりに取り組む。</p> <p>○小・中学校・大学が連携して、授業における児童生徒の学びの過程を見取り、可視化するための分析方法を検討する。</p> <p>○中学校では、いよいよ全国技術・家庭科研究大会が行われるため、準備を進めていく。</p> <p>○教育実習生の事前指導では、学生が自由な題材を設定し、独創性のある授業を提案できるように体験的な学習を取り入れた授業づくりを指導する。</p> <p><次年度の体制></p> <p>部会長 佐々木信子 (教育文化学部) 副部会長 近藤 史子 (附属中学校) 書記 石川 優子 (附属小学校)</p>		

部会名	生活・総合・遊び部会	記入者名	中野 良樹 (所属：こども発達・特別支援講座)
-----	------------	------	-------------------------

<今年度の実績>

1. 学部および小学校、幼稚園との連携事業

- ① 平成28年6月10日、附属小学校公開研究協議会において学部との共同により提案授業を行った。授業者は附属小学校1年B組担任・嶋崎裕子教諭、1年C組担任・福田佳子教諭。学部からは学校教育課程所属の中野良樹准教授が助言指導を行った。
- ② 学部教員免許科目「生活科教育学概論」において、小学校から福田教諭が講師として生活科の実践について講義した。
- ③ 平成29年1月23日、附属小学校1年B組の嶋崎教諭を授業者とし、幼小連携相互乗り入れ授業を行った。附属幼稚園年長組担任の佐藤菜穂子教諭がTTとして授業に参加した。
- ④ 平成29年2月13日、附属小学校校内研究会として1年C組担任の福田教諭が提案授業を行った。学校教育課程の中野准教授が助言指導として授業の展開について共同で検討した。また、幼小の交流をテーマにし、提案授業の延長として1年生の児童が附属幼稚園の年長組を訪問し、小学校のことを紹介する活動に取り組んだ。

2. 附属小学校における他校園との交流活動

- ① 特別支援学校ふたば学級との交流
 - 1回目 期日：7月12日(火) 12:30～13:20
場所：附属小学校 内容：一緒に給食を食べよう
 - 2回目 期日：10月26日(水) 10:45～11:30
場所：附属小学校 内容：一緒に昔遊びを楽しもう
 - 3回目 期日：2月21日(火)
場所：特別支援学校
内容：特別支援のふたば学級児童の「おむすびころりん」の劇を見に行く
- ② 附属幼稚園年長児との交流
 - 1回目 なかよしタイムパートI (附属幼稚園で遊ぶ)
5月6日(金) 1C、5月9日(月) 1A、5月13日(金) 1B
 - 2回目 なかよしタイムパートII
7月6日(水) 1B (幼稚園で遊ぶ)、7月12日(火) 1C (小学校ふれあい広場で遊ぶ) 8月31日(水) 1A (小学校はとの子ホールで遊ぶ)
 - 3回目 幼小連携相互乗り入れ授業
1月30日(月) 1B。生活科「おしえてあげるね ふぞく小学校のこと」
 - 4回目 2月2日(木) 1C。生活科「おしえてあげるね ふぞく小学校のこと」年長児担任の先生の話聞く
 - 5回目 2月22日(水) 1C。生活科「おしえてあげるね ふぞく小学校のこと」1年生が年長児に学校のことを教える。

3. 附属特別支援学校 生活単元学習における校園間の交流について

時期(月)	相手校	内容
6月	附属小学校	○給食交流(一緒にゲームなどをした後、一緒に給食を食べる)
7月	附属小学校	○給食交流(一緒にゲームなどをした後、一緒に給食を食べる)
	附属幼稚園	○園庭で一緒に遊ぶ
10月	附属小学校	○学年交流(お話遊び)
12月	附属小学校	○交流(学年/学級) ・交流会の準備、うどんを振る舞う活動 ・ステージで学習成果を発表
	附属幼稚園	○もちつき交流
1月	附属幼稚園	○雪遊び交流
	附属小学校	○給食交流(グループでの活動の後、一緒に給食を食べる)
2月	附属小学校	○交流(学年/学級) ・お話遊び
		・一緒にうどん作り、うどんを振る舞う活動
		○お楽しみ会(附小の学級活動に招待)

<次年度に向けた予定・課題等>

上記交流事業の整理と活用。平成29年度公開研究協議会における授業提案、4年次卒業論

文を活用した幼小と大学での共同研究の推進。

<次年度の体制>

部会長 中野 良樹

副部会長

書記 鎌田 育子

部会名	学校経営 (保護者対応、学部・院や外部との連携、教員養成・教育課程経営等)	記入者名	佐々木和貴 (所属:英語・理数講座)
-----	---------------------------------------	------	---------------------

<今年度の実績>

- 第三期中期計画の初年度にあたり、平成 28 年度の年度計画の作成・実施・評価を行った。
- 附属学校経営委員会を開催し、附属学校園全体に関わる諸事項を取り上げて協議を行った。
- 附属学校運営会議を開催し、学部と附属学校園全体に関わる諸事項を取り上げて協議を行った。
- 附属学校運営全学協議会を開催し、大学と附属学校園全体に関わる諸事項を取り上げて協議を行った。特に、施設・設備や財政に関わる事項を協議し、改善を行った。
- 附属学校地域連携協議会を開催し、秋田県教委、秋田市教委、各校園学校評議員から附属学校園へのニーズを出してもらい、協議を行った。
- 附属学校子どもの人権委員会を開催し、附属学校園におけるいじめなど、子どもの人権をめぐる状況について、保護者代表も交えて協議した。
- 教職大学院の発足に伴い、教職大学院の専任教員と附属学校園の担当者が協力して、附属学校園を活用した院生の教育実習等を実施した。
- 附属学校園全体の中期計画期間にわたるビジョンに基づいた行動プランを作成した。

<次年度に向けた予定・課題等>

- 第三期中期計画にしたがって、平成 29 年度の年度計画の作成・実施・評価を適切に行う。
- 学部と附属校園（特に経営部会）が協力して、6年ごとの外部評価を実施する。
- 附属学校園全体の中期計画期間にわたるビジョンに基づいた行動プランの実施と検証、改訂を行う。（平成29年度-33年度）
- 授業改善、校種間連携、特別支援等について、4校園全体として連携して取り組み、成果をあげることを目指す。
- 多忙化解消へ向けて、附属学校園全体で問題意識を共有する。

<次年度の体制>

部会長	佐々木和貴
副部会長	工藤 絹子
書記	原 義彦

部会名	幼稚園	記入者名	山名裕子（所属：こども発達・特別支援講座）
-----	-----	------	-----------------------

<今年度の実績>

1. 附属教員の学部での授業

No.	授業名	実施日	担当者
1	教職入門	5月11日(水)	菊地彩子
2	教育実習 事前事後指導	6月16日(木)	渡邊真紀・菊地彩子・佐藤菜穂子・菅生由香子・白畑展子
		12月1日(木)	渡邊真紀・佐藤菜穂子・菅生由香子・白畑展子
3	幼児の理解と指導	7月6日(水)	中村知江子
4	初等生活科教育学	1月17日(火)	白畑展子

2. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

(1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録(大学教員の保育観察・記録 ～週1回程度)

① テーマ1: 幼稚園教育課程の研究

(a) 3年保育の教育課程の再考～友達との関わりに着目して～

(附属幼稚園研究テーマ)

(b) 幼児教育における計画概念の検討(奥山順子)

② テーマ2: 遊びを中心とする保育を考える

③ テーマ3: 秋田県幼児教育史に附属幼稚園が果たした役割(奥山順子)

④ テーマ4: 幼児期から児童期にかけての認知発達～3年保育における発達の連続性・非連続性～
(山名裕子)

⑤ テーマ5: 子ども自らがつくる安全な環境(瀬尾知子)

(2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り

① 日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築 参与観察・保育参加

② 大学における保育講座(秋田乳幼児保育研究会)への附属教員の参加(6回)

③ 大学教員からの研究情報の提供

- ・研究会報の発行 『秋田乳幼児研究会報 第9号, 2017年3月』の発行予定
- ・「研究たより」の発行 No.61～66.
- ・幼稚園教員向け保育情報「さくら通信」の発行 No.16～31(奥山)

(3) 保育実践研究・保育カンファレンス(学部教員の研究保育・園内研究会等への参加)

No.	実施日	内容	参加者	備考
1	4月15日(金)	5歳児(そら組) 保育研究会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加
2	5月24日(火)	4歳児(ほし組) 保育研究会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
3	6月7日(火)	第1回公開研協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	研究打ち合わせ

No.	実施日	内容	参加者	備考
-----	-----	----	-----	----

4	6月9日(木)	3歳児(はな組) 保育研究会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
5	6月21日(火)	第1回公開研究協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	研究打ち合わせ
6	6月30日(木)	公開研究会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参加・コメンテーター
7	7月12日(火)	3歳児(もり組) 遊びを語る会	奥谷順子・山名裕子	参観・研究会への参加
8	8月22日(月)	保育研修会「子ども理解の カンファレンス」	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	研修会講師(園外からの参加者もあり) 研修会への参加
9	10月24日(月)	第2回公開研究協議会 打ち合わせ	奥山順子・山名裕子	研究会打ち合わせ
10	11月10日(木)	第2回公開研究協議会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参加・コメンテーター
11	12月5日(月)	3歳児(もり組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
12	12月9日(水)	4歳児(ほし組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参観・研究会へ参加
13	12月14日(水)	3歳児(はな組) 遊びを語る会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
14	12月16日(金)	5歳児(そら組) 遊びを語る会	奥山順子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
15	2月2日(木)	3歳児(もり組) 保育研究会	奥山順子	参観・研究会への参加
16	2月21日(火)	5歳児(そら組) 保育研究会	奥山順子・山名裕子・瀬尾知子	参観・研究会への参加
17	2月23日(木)	幼小相互乗り入れ TT 保育, 合同研究会	奥山順子・山名裕子	参観・研究会への参加

(4) 教育実習事後指導を通して

- ① 大学教員が事後指導において学生の保育記録をもとにしたカンファレンスを実施。
- ② 記録を練り直し、再考察をまとめたものを編集して冊子として作成。
- ③ 幼稚園教育実習の記録『たまご14号(2016年12月発行)』

3. 附属4校園の交流・参観

(1) 附属小学校

1年生と5歳児の交流(5月6日, 9日, 13日, 7月6日, 12日, 8月31日, 2月1日10日)

(2) 附属特別支援学校

- ① 高等部と5歳児のサツマイモ苗植え交流(5月11日)
- ② 全児童生徒と全園児の「竿燈交流」(7月8日)
- ③ 小学部ふたば学級と交流(7月15日, 1月19日)
- ④ 小学部ふたば学級と全園児の「おもちつき交流」(12月14日)
- ⑤ 小学部ふたば学級と全園児の「やきいもを食べよう」(10月4日)

(3) 附属中学校

附中1年生職場体験（1月20日、25日、30日、2月7日）

4. 卒業研究における観察

- (1) 幼児期の主体的な活動としての「遊び」の中での「学び」—5歳児の「試行錯誤」に着目して—
- (2) 幼児期における友達関係の育ち—3歳児は友達とどのようにつながっているのか—
- (3) 葛藤から考える4歳児の子ども同士のかかわり
- (4) 「同じ」ということを手がかりとしたかかわり—3歳児にとってのイメージの共有とは—

<次年度に向けた予定・課題等>

1. 大学教員の継続的な参与観察とそれを生かした研究推進

- (1) 28年度同様に、学部・附属幼稚園が連携、協力してそれぞれの立場で研究を進め、保育・研究双方の充実を図る。
- (2) 双方の主体性が発揮できる対等な関係での共同研究体制の模索。

2. 附属教員の学部での授業

教職入門，教育実習事前事後指導，幼児の理解と指導，初等生活科教育学

3. 附属学校園教員と大学教員との共同研究

- (1) 教員の共同研究を目的とする保育観察・記録
- (2) 附属幼稚園との共同研究の基盤となる関係作り
日常的な保育実践の理解と相互の信頼関係の構築
- (3) 学部教員の研究保育・園内研究会・保育カンファレンスへの参加
- (4) 教育実習事後指導を通しての学生指導

4. 大学教員の附属学校園の公開研究協議会などへの参加

- (1) 附属幼稚園で2回の公開研究協議会を実施予定
第2回目は保育以外の企画（講演，シンポジウム等）を大学教員が担当
- (2) 公開保育の事前研究会への参加
- (3) 保育へのコメンテーターとしての参加

<次年度の体制>

部会長 奥山 順子

副部会長 小玉リツ子

書記 山名 裕子

部会名

特別支援学校

記入者名

田口 睦子（所属：附属特別支援学校）

<今年度の実績>

① 学部・研究科の教育の充実に向けた共同の取り組み

- ・ 附属特別支援学校で、特別支援教育コース4年生（3名参加）が実践力強化及び教職志望者に必要な資質・能力向上のための授業参観をした。
- ・ 学部の授業に教頭、各学部主事、進路指導主事、養護教諭が参加し、特別支援教育の校内支援体制の作り方、学部経営や進路指導の実際、学校保健の現状について講義した。

② 公開研究協議会などに向けた取り組み

- ・ 公開研究協議会及びその事前研究会、オープン研修会において、山名裕子先生・斎藤孝先生（小学部）森和彦先生（中学部）、藤井慶博先生・鈴木徹先生（高等部）が研究協力者として助言をした。

③ 共同研究や共同授業などの取り組み

- ・ 藤井慶博先生と本校研究部による共同研究「個別の教育支援計画の活用の実践」を実施した。
- ・ 爲我井壽一先生による歌唱指導（高等部）、長瀬達也校長による造形的な活動（小学部ふたば学級）など共同授業を行った。

④ 外の研究・研修団体などに関わる取り組み

- ・ 地域支援部主任が民間保育団体研修会の講師、秋田県保育研究大会の分科会助言者を担当した。
- ・ 教頭が秋田県教育研究会特別支援教育部会「夏季研修会」で講師を担当した。

⑤ 会の組織、運営などに関する取り組み

- ・ 地域支援部主任・各学部主事・管理職でセンター的機能推進委員会を新たに組織し、本校の地域支援の方向性や校内での協力体制等について検討した。

<次年度に向けた予定・課題等>

- ・ 心のバリアフリー推進プロジェクト（仮称）を立ち上げ、附属小・中学校・幼稚園の教員と共同で発達段階に応じた障害理解教育と交流及び共同学習を行い、多様性を尊重する心の育成と障害への理解を推進する。
- ・ 附属四校園の共通課題である附属校園内の特別支援教育の推進に向けて、研修会の実施や個別の相談体制の構築を進めていく。

<次年度の体制>

部会長	長瀬達也（校長）
副部会長	田口睦子（副校長）
書記	跡部耕一（教頭）

平成 28 年度 附属学校学部共同専門委員会

委員長 川村教一 (英語・理数教育講座)

副委員長 田口瑞穂 (英語・理数教育講座)

平成 28 年度

秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会 実践報告書

発行 平成 29 年 3 月 31 日

編集 秋田大学教育文化学部附属学校学部共同専門委員会

発行者 秋田大学教育文化学部

〒010-8502 秋田市手形学園町 1 番 1 号